

幻魔シリーズ

真・幻魔大戦

2

平井和正





TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

平井和正

真・幻魔大戦 2

Kazumasa Hirai ©1980

カバー画 生頼範義 デザイン 矢島高光

本文挿画 生頼範義

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 久保寺進〉

幻魔シリーズ

真・幻魔大戦

2

平井和正



真しん・幻げん魔ま大たい戦せん
2

平井和正ひらい かずまさ



真・幻魔大戦
2

平井和正

真・幻魔大戦Ⅱ目次

スーパー・バロック・プリンセス——

ザ・ESPファミリー——116

「幻魔宇宙」への招待Ⅱ座談会篇——230

《主な登場人物》

●リア姫——トランシルヴァニア城に十三世紀以来続く小王国ジーベンビュルゲン王室の第三王女。『ヨーロッパの宝石』と
うたわれる美貌に加えて、天才的な超常能力者としての才能を『グエーサー』に買われて、一九七九年、アメリカ合州国に
向った。カトー社長の邸宅を幽体となって偵察するうち、ドクター・タイガーマンの毒牙にとらわれてしまった……。

●ムーンライト——『グエーサー』のカトー社長の秘書的存在であり、リア姫の世話係。黒い瞳の神秘的な美貌の東洋人女性。
●プリンセス・ルナ——リア姫の長姉。一九六七年、ジーベンビュルゲン王室の使節として訪米の途中、宇宙からのエネルギー
によって乗機が破壊され、彼女の意識は三八〇万光年をへだてたかなたで、宇宙の『意識体』フロイに銀河系島宇宙の
『救世主』を探そうと告げられた。ルナは『戦士ベガ』を目覚めさせ、邪悪な宇宙のエネルギーに消滅してゆく星団を眼の
あたりにして、巨大な使命を負うことを決意する。

●フロイ——物質宇宙を超えた高次元宇宙の意識エネルギー体。『幻魔』と対決する宇宙の知的種族の連合軍『大連盟』の導
師的存在。

●戦士ベガ——ヒューマノイドの異星人。恒星空間において二〇〇年間にわたって『幻魔』との戦いに参加した歴戦の勇士。
大敗して以来、二千年間破壊された宇宙機のカプセル内で眠っていた。

●アリエータ——ジラ星人の少女で、戦士ベガの恋人。

●ライアン機長——『グエーサー』の重役専用ジェット機の機長。

●『幻魔』——宇宙の生成から数百億年にわたって、暴虐の限りをつくす負のエネルギー。あるときは精神エネルギーとして、
また物質の形態で侵蝕する全ての邪悪な波動の根源的存在。

●『グエーサー』——現代の超国家的帝国ともいうべき超大多国籍企業。

●『ビッグ・ジョン』——『グエーサー』を率いる帝王・カトー社長。全世界の超能力者たちを集め、邪悪な計画をたてつつあ
る様子……。

●ドクター・レオナード・タイガーマン——『グエーサー』の超能力開発研究所長。激怒すると体中に虎の縞模様が生じる。
醜悪な野心家

スーパー・バロック・プリンセス

1

テレパシスト、ジョージ・ドナーの全身から汗がどつと吹きだした。信じがたいほどの発汗の量だった。みる間に足許に汗の池ができた。

ドナーはくりりと背中を向け、後先の考えもなく逃げだした。ここが特殊な心霊的内宇宙であることも忘れていた。走って逃走することで、タイガーマンの内宇宙から脱出できるのかどうか、それすらも考えなかった。本能的な逃避衝動に身をまかせたにすぎない。

絶え間なく口から意味をなさない声、悲鳴が漏れ出ている。それがひどく動物的、生理的な醜い啼き声な

ので、彼はうんざりした。

長い鞭のようなものがひゅっと飛んできて、ドナーの足首に巻きついて引き留め、彼はもんどり打って転んだ。足首に激痛が走り、ドナーはショックを受けた。これがたとえ幻想的な心霊世界であっても、肉体的苦痛は非現実のものではないと知ったからだ。

足首には透明なナイロンの釣糸のようなものが巻きついていていた。皮膚に食いこみ、血を噴きだしている。ドナーはあわててナイロン糸をほどいた。刃物で斬ったような傷口だった。

ナイロン糸がドナーの手の中でうごめいた。気がつく、それは釣糸ではなかった。虎の頬から生えた剛い髭の一部であった。

リア姫の白い情欲的な肉体を二重の意味で貪り食らっている虎は、ドナーを見てにんまりと笑った。鮮血にまみれた口を舌なめずりし、巨大な鋭い牙を見せつける。

虎はドナーを見ても驚きもせず、喜んでいた。人食い虎が喜ぶ理由は一つしかなかった。

タイガーマンは虎との間に自己同一化という関係を成立させている。タイガーマンが非道德的であるのは、虎がそのような道德的規範に捉われないためだ。虎は元々非人間であり、アモラルな存在だからだ。

従ってタイガーマンの虎は、リア姫とドナーを自由に食らうことができるのだった。

内宇宙の虎は、現実の虎よりもはるかに危険な存在だった。ドナーの足首に巻きつけて彼を捕えたのは釣糸のように長く伸ばした頬髭の一部であった。

ここはタイガーマンの意志に完全に従属する世界であり、虎は神通力を備えた妖怪と同じである。

ドナーは身を起こし、用心深く虎を見詰めながら、どうやって脱出しようかといそがしく考えた。

いたずらにパニックに陥り、逃げ走っても無益だと悟っていた。ドナーの肉体のある場所へ戻る必要があ

る。これは一種のアストラル・プロジェクションなのだから、肉体へ戻る方法を見つけたせばいいのだ。

悪夢で恐ろしい怪物に追いかけられた時とまったく同じだ。しかし、ドナーは現実の肉体を持った自分がどこにいるのか知っているのだから、悪夢に怯えて度を失っている者よりはるかに有利なはずである。

ドナーは夢を見ている者のように意識が鈍くなっていない。理性の光に頼って退却することができる。

にんまり笑っている虎が、再び怠惰に頬髭を捕縄に変えてドナーに伸ばしてくる。食らっているリア姫を放してまで、襲いかかってくる真剣味はなさそうであった。

虎の頬髭に捉まれば厄介なことになると知っているドナーは用心深く後退りした。

肉体に戻るのだ、早く、と自らにいい聞かせる。

方向感覚さえあれば、帰還は困難ではない。襲ってきた頬髭に空を掴ませて、ドナーは意識を危うく引き戻した。

“ドラキュラ城”の屋上で、まばゆく輝く月光を浴びて、ドナーはショックの余波の身慄いをした。物凄いほどの発汗が服をぐっしり濡らし、足許に小さな汗



9 スーパー・パロック・プリンセス

のプールを造っていた。現実にもひどい大汗を掻いたわけである。

足首に痛みを覚えて、見降すと、鋭い刃物で切ったような傷口が足首を取り巻いていた。苦痛は現実のものであり、出血もしている。心身相関現象であった。話には聞いているが、ドナー自身が味わうのは初めてだ。

催眠術で、鉛筆を肌に押しつけ、焼け火箸という暗示を与えると火ぶくれが皮膚に生じる。狂的なクリスチャンが、キリストの十字架にかけられた四肢の傷口に当る部分に出血する「聖痕」現象もそうだ。

それにしても、凄まじいタイガーマンの内宇宙だった。偏執狂の内宇宙であり、そこには獣人現象から人肉食^{バリウム}まで、タイガーマンという男の異常性を象徴するものが完全セットで揃っていた。

タイガーマンは本物の悪魔憑きの殺人狂の素質がある。放置しておけば、若い娘が次々に蒸発し、内臓を食い散らされた惨殺死体で発見されることになりかねない。

タイガーマンは必ず本物の「人食い虎」になるだろう、とドナーは確信した。もう半ばは気が狂いかけて

いる。彼の内宇宙で見た通り、暗黒の衝動にしっかりと憑かれてしまっているのだ。

ドナーは体の平衡を失って、その場にうずくまってしまった。不意に烈しく疲労していることに気付いた。タイガーマンの心霊的宇宙でエネルギーを奪取されたことは間違いない。

人の心が蔵する暗黒エネルギーは、他人の精神エネルギーを奪取し、冷感と疲労をもたらすものだ。いつてみれば、薄着のまま冷凍庫に入りこむようなものである。PSI感覚の鋭敏な者は生命までも危険に瀕する。

惨めに疲労しきって、ドナーは襲ってくる虚無感、無力感と闘った。

とにかく、これだけははっきりとわかった。リア姫は、タイガーマンの遠隔催眠によって、夜間連れだされた。放置しておけば、リア姫には非常な危機が迫る。それはたぶん、彼女の落命によって終局を招き寄せるであろう。

早くリア姫の後を追ひ、タイガーマンの悪魔的な陥^{かん}穽^{せい}から救出しなければならぬ。

サイキック能力によってリア姫の居場所を突きとめ

るのだ。

しかし、不意に泥のような異常な疲労に攔まれてしまったドナーにとって、それはあまりにも億劫であり、実行不可能なほどの難事に思えたのだ。

2

白と黒だけの世界を、リア姫は歩いていった。強烈なコントラストのきいたモノクロームの道は、遠近法による秩序が成り立っていなかった。

さながら影絵の宇宙に足を踏み入れてしまったようであった。昼か夜か、それすらも判然としなかった。いつの間に世界から色彩が失われてしまったのかわからない。これまで経験したことのない白と黒でくっきりと区切られたモノクロームの世界を、リア姫は急ぎ足に進んでいた。

リア姫の進路を妨害する者は出現しなかった。それは彼女が、どこをどう道を選ぶか知り尽しているためであった。

彼女は他人に見つかってはならないのである。それを強制するきびしい意志が、彼女の全行動を律してい

た。

いつもの夢の彷徨であれば、いろいろ寄り道し、探索していく、興味深いことどもを無視していくのはそのためであった。

館の地下室の全景を透視し、リア姫は後で観に行こうと思った。これだけの感興を催すものを見すごす手はないと思っていた。

彼女を駆りたて、一定方向に追いたてる他の支配的意志は、リア姫の猫的性格に付加された首輪に似ていた。

彼女自身の意志を封じて、強引にどこかへ引きずっていきつつあるのだ。

反抗は許されなかったが、これほど彼女の性格にとって不快な侮辱はなかった。だから、他からの支配に服しながらも、彼女は不機嫌な猫のようだった。

パースペクティブの狂ったぎらつくモノクロームの道は果てもなく続く。ここには広がりというものがなく、二次元の奥行きがなく平べったい世界であった。夢を見ているのだという自覚は依然として続いていた。夢である特徴として、五官の感覚というものが欠如していた。

リア姫は視野狭搾を起こしているような白と黒の道をたどり続けた。一度だけ、四方八方が大きく展^{ひら}けたような場所を通った。そこからは陰気な大きな湖がよく見渡せた。やはりその光景も白と黒だった。

湖には大きな竜がいて、ボウリングのボールのような大目玉をぐりぐり回転させて、リア姫を眺めていた。根性悪のように見えたが、べつに手出しをする気配はなかった。

リア姫はこれまでも夢で何度も通った道であることをおぼろげながらに思っていた。だから、なにも迷うことなく、すいすいと歩くことができるのだ。

城の建物の窓から、リア姫を見ている顔があった。これも見憶えのある青年の顔であった。背のひよろりと高い若者で、何度も見かけたことがある。その愕^{おどろ}いた顔を見ると、リア姫は笑いたくなり、青年に向って手を振ってやりたくなった。

そのうちにまた逢うだろう、とリア姫は思った。今は忙しいのでお相手をしている暇がなかった。可愛らしい男の子だ、とリアは独り笑いしながら思った。背が高く、手足が長すぎて、生まれたての仔馬を連想させるところがある。しかし、リア姫にとっては恰好の

遊び相手だった。彼にはあの「力」、X機能^{エックス}がたっぷりと蔵^{かく}されているからだ。沢山のゲームをして楽しむことができる。

だが、それは後まわしだ。

リア姫は進んだ。館の内部はさながら迷路そのものだった。彼女が充分に探険していなければ、困難を覚えたかも知れない。

リア姫には、館の内部構造が透視図法で描いたよりも正確に透視することができのだった。どこにどのような仕掛けがあり、どのような人員配備があるのか、完全に呑みこんでいた。星体放射で抜け出した時、保安要員に触れるほど近くまで覗きにいったことがある。

しかし、鈍感な「X機能」の欠けた男たちは、リア姫の気配すら感じないようだった。もつとも、彼らはモニターTVのスクリーンか、ポルノ雑誌か、どちらかに目をやるのに精一杯だったからだ。

夢というのは妙なものである。リア姫はモニターTVのカメラには己れのアストラル・ボディが映らないのを幸いに、館中を探険してまわったのだ。今は完全に内部構造に通曉してしまっていた。

リア姫は、保安要員に連れ去られたライアン機長が

幽閉されている小部屋を透視することができた。機長は床に直接うずくまり、茫然としていた。思考が混濁しているのだった。ニューヨークに住む彼の元愛人に「クエーサー」の隠された凶暴な毒針を持つ触手が伸びていることを、ライアン機長は知らずにいた。

リア姫は歩き続けた。

そして、白と黒のモノクロームの道の先に、大きな扉が出現した。

扉が開くと、その向う側には虎がいた。白と黒の鮮やかな縞模様でくつきりと隈取られた虎。その目だけが金色に光っていた。

虎が頬髭を震わせ、にんまりと笑った。

3

タイガーマンは口が耳まで裂けるほどニタニタ笑っていた。

これほど話がうまく運ぶとは、さすがに思っていなかったからだ。館の中はむやみに錯綜しているし、保安要員の監視もある。相手が無事にたどりつけるかどうか、確信はまるでなかった。

もちろん途中で発見されたにしろ、捕えられるのはタイガーマン自身ではない。相手は夢遊病のようなものだし、タイガーマンのやったことが露見することはまずないだろう。

ところが、リア姫は彼の予想を裏切って、ちゃんとやって来たのである。しかも、思いがけないほどの早さだった。

この分なら、たっぷり時間をかけて楽しめる。

それで、タイガーマンは口が耳まで裂けるような笑いを浮かべ、悦に入っていたのだ。

扉の向う側に立っているリア姫は、薄い夜衣をつけただけで、下着はなにもないことが一目瞭然であった。足は裸足のままである。

彼女が寝台から立ち上り、そのまま歩いてきたことは明らかであった。黄金の豪華な巻き毛は寝乱れ、セクシーだ。

精気のない碧い瞳が、焦点を失ったまま見開かれている。正常な精神状態にないことはだれの目にもわかる。

タイガーマンはぞくぞくしながら、野卑な動作で思わずもみ手をした。

「部屋に入れ」

と、彼は命じた。リア姫は開いた戸口に立ちはだかっているタイガーマンに体をこすりつけるようにして命令通り部屋へ入ってきた。若い娘の尖った乳房の感触を、腹のあたりに押しつけられて、タイガーマンは強いスリルを感じ、ほくそ笑んだ。

リア姫は完全に催眠下にあるし、どんな命令にも従うということがはつきりしたからだった。

もちろん、タイガーマンの要求する、どんなベテランの売春婦もことわる類いの性的サービスを、若い無垢なリア姫は完全に提供するということである。

扉を閉めきる前にタイガーマンは通路を確かめ、保安要員の気配がないことを確認した。

リア姫は覇気のなさを体の線に見せて、棒のように立っていた。こればかりは術中にあるからで、いかんともしがたい。なにをさせても機械的になってしまうのだ。

時間をかけてじっくり仕込む場合はともかくとして、よほどセックスの経験を積んだ女でなければ、満足する結果にはならないものである。

タイガーマンは、通りすがりの見知らぬ女を術の支

配下に置くことで、そのへんの機微を知ったのだった。

もちろん、そんなことはどうでもいい。見も知らぬ女を相手に、犬のように番うわけではないからだ。

ともかく、彼が手に入れたのは、真正正銘の姫君であつた。高貴なことは「クエーサー」の保証つきである。これほど刺激的なことはない。「帝王」が手をつける前に、ちよろりと盗み食いというわけだった。

現場を取りおさえられない限り、露見する恐れはない。いくらでもシラを切り、知らぬ存ぜぬで押し通し、相手の女も決して口を割るまい。第一、彼女の顕在意識においてはなにも知らないのだ。

知らないことは、たとえ拷問をかけても喋るわけにはいかない。自白薬を使ってもむだだ。催眠術に精通した精神神経学者が入念に識閾下を洗いださなければ、なにも掴めないことはわかっている。

なにも心配はない、とタイガーマンは何度もくり返して自分に保証した。

尻尾さえ「帝王」に掴まれなければ、こっちのものだ。

サイキック能力と無縁のヒトザルどもに優位に立たせておく自分ではない、と彼は自信たっぷり豪語し

た。自分自身にさえ自慢話をするのが彼の奇癖の一つであった。

タイガーマンは棒を呑んだように突っ立っている獲物のまわりを、蟹^{かに}みたい横歩きで徘徊した。悦に入った含み笑いが自然に漏出するのをとめられない。

体を上下に揺すぶって幼児みたいにはしゃぎたて、両手をぱたぱたと体の側面にはたきつけた。

毛むくじやらの醜怪な男が本気でまともにやるのである。正気の沙汰ではなかった。

チンパンジーが憑いているのではないかという奇行をひとしきり演じた後、タイガーマンは飾り柱付の大きな寝台の端にどっかりと腰をおろし、期待に唸り声を漏らしながら、リア姫をさし招いた。

「ここへ来い」

リア姫が命令に従ってやってくると、タイガーマンの鼻孔はふくらみ、額から汗がどっと噴きだしてきた。

薄い夜衣だけの彼女がやってくると、彼は大きく開いた己れの股の間に彼女の下半身をはさみ、逃げられない用心のように、ものすごく太い剛毛の密生した両腿でがっちり締めつけた。

若い娘の張り詰めた肌の感触がこよなく快く、タイ

ガーマンはおぞましい有頂天に到達した。滑らかな絹の感触の上から、大きな凶悪そうな両手を操って、微妙な曲線に満ちた娘の体をあちこち撫でまわす。よだれが浅ましく口のへりからこぼれてきたが、気がつくようすもない。

出だしはまだしも、男としてまともそうに見えるのだが、内心ではそうでない。どうやってこの捕われの高貴な女性に、変質的な虐待——性的侮辱を加えてやるのかと、邪悪な考えをめぐらしているのだった。

通りすがりの女としか性関係を持ってないこの男は、その間に変質者としての自分を育てていた。相手をよく知らなければ、いくら虐待を加えても気にならないからだ。また相手の女に訴えられる懸念も少い。

リア姫の小柄な体をがっちりと逞しい腿の間に捉えたタイガーマンは、小ぶりだが形よく上向きに尖っている乳房を両手に一つずつ握んだ。果実の感触だった。いつものタイガーマンのセックス・マナーだと、両手に力をこめて握み潰すようにし、大きな掌の形をした黒痣がつく虐待を愉しむのだが、今夜は新しいアイデアが浮んだようである。

性的虐待者のあからさまな痕跡を残してはまずいと